

有意義な学生生活のために,1999年4月 高島 均

専攻 理論経済学

担当科目 初級ミクロ経済学・初級マクロ経済学・中級マクロ経済学

担当演習 マクロ経済学の分野を扱う（日本経済論を含む）

日本社会は、個人が大学においてどれだけ勉強したかが全く評価されない社会である。個人の能力面における評価は、どれほどの難易度の大学に入学したかどうかだけで決まっている。このような社会において、学生が大学における勉学に意欲を持ち得ないのは当然の事であり、従って、どこの大学においても、学生は全く勉強しようとしなない。かかる大学状況に対して、社会は建前を主張するだけである。曰く、大学は勉学の間であるから、当然学生は勉強しようとして入学してきた筈である、それなのに学生が勉強しようとしなないのは、大学における授業がいいかげんで、学生が幻滅しているからだ、大学教授が研究にばかり熱心で教育に関しては怠惰だからだ、大学教授が、教育に熱意を持ってしっかりした授業をすれば、問題は解決される、といった具合である。しかし、日本の大学において、教員が研究ばかりに熱中してられるような、「恵まれた」大学は、いくつもない。かくして、多くの大学において、教員は、教育の間としての大学を実現しようと、絶望的かつ自虐的な努力を重ねる事となる。大学における努力が、以降の人生において全く評価されない社会にあって、誰が真面目に勉強に励もうとするだろうか。この極めて常識的な事実を、誰一人指摘しようとしなない。

大学において学生が勉強しない国、翻って、大学で自ら選んだ分野をどれほど一所懸命勉強し、成果を上げて、それを就職試験や大学院入学試験に際し全く評価しない国は、私の知るところでは世界の中で日本以外にない。学生時代に自ら選んだ分野の勉強を全くしななかつた学生が、「 のため、大学では勉強する気がしななかつた、勉強しななかつた、しかし、就職したならば一所懸命仕事をします、大学院に入学したならば一所懸命勉強します。」といったからといって、一体誰がそんな言葉を信用するだろうか。その時置かれた立場において期待された事（経済学部の学生ならば経済学を勉強する事）をしななかつた人間が、会社に入ってから一所懸命仕事をしたり、大学院に入学してから一所懸命勉強したりする筈がない。そのような学生は、何やかにやの理由をつけて、就職した後は仕事をせず、大学院に入学した後は勉強をしなないのである。この極めて当たり前の事が、日本社会では全く無視され、「弱者である学生」は、「教育に怠惰な教授」の「犠牲者」として同情される存在と見なされている。

日本は、あらゆるところで「弱者」が強権を振るっている社会である。君たちは、世界中で非常識とされて非難されている事が「常識」としてまかり通っている、他に例を見ないほど異常な国に住んでいるのである。かかる社会の一員として君たちが大学生活を送らなければならない事に対し、私は同情を禁じ得ない。しかし、だからといって、君たちがその風潮に同調する事を認めるものでない。高等教育の間である大学は、高等学校までの初等・中等教

育の場と異なり、勉学の間である。何時如何なる時代、社会においても、結局は、ごく一部の、真面目で犠牲的な精神の持ち主によって支えられてきた、社会がそれを評価しないとしても。本学における学生生活を通じ、君たちが、世界の中で通用する人物に成長し、日本社会の変革のために活躍する事を望む。現在に責任を負っているのは、われわれ中年である。青年は、未来に責任を持っている。